

穢れを祓う巫女は、守り手の腕の中でだけ綻ぶ ――交わりて清まる、二人の祓い儀――

祓うたび身を澱ませる退魔の巫女と、その澱みを清める守り手。気と精を交わす夜だけ、凜とした巫女は一人の女に還る。和風伝奇・純愛。

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

穢^{けが}れを祓^はう者は、祓^はったぶんだけ己を澱^いませる。

それが、この国の退魔に課せられた古い理だった。妖を斬り、祟りを鎮め、土地に巢食^{しやうき}った瘴^{しやう}氣を祓^はう――そのたびに、祓^はわれたはずの澱^いみのひと匙^しが、祓^はい手の身の奥へ残^{のこ}っていく。澱^いみは静かに積もり、心を蝕^くみ、やがて祓^はい手そのものを内側から喰^くらう。祓^はい続ける巫女ほど、誰よりも穢^{けが}れに近づいていく。これほど理不尽な定めもない、と壬生朔^{みぶさく}はいつも思う。

だから巫女には、対となる守り手が要る。

社^{やしろ}の奥、篝火^{かがりび}のひとつだけが残された板間で、朔は腕のなかの女を見下ろしていた。

綾辻^{あやつじ}鈴音^{すずね}。この界限^{かいわい}で「祓^はいの巫女さま」と畏れ敬^{かしこ}まれる女が、今、別人のように息

を乱^{みだ}している。

宵のうちに、彼女は里に取り憑^よいた古い妖^まをひとり祓^はった。祓^はいきった代償^{たいげい}に、受けた澱^いみが彼女の白い肌の下で渦を巻いている。放^{はな}っておけば、明日には立^たてなくなる。

澱みに沈んだ巫女を引き戻せるのは、対を結んだ守り手と素肌を合わせる、ただひとつの法だけだ。

還^{かえ}り祓^はい、と人は呼ぶ。

肌を重ね、気を交わし、精^{せい}を分け合うことで、巫女の身に巢食った澱みを押し流し、涸れた巫力^{ふりよく}を満たす秘めごと。対を結んだ二人にしか効かぬ、対のためだけの儀式。

昼の鈴音を、朔は思い浮かべる。背筋を凜と立て、領巾を風になびかせ、迷う声には静かな声で応え、どんな妖を前にしても眉ひとつ動かさぬ気高い巫女。里の者が手を合わせて拝む、あの近寄りがたいほど清らかな立ち姿。

その同じ唇が、今は朔の名だけを、熱を含んだ声で呼んでいる。

「……朔、どの」

ほどけた黒髪が、汗ばんだ首筋に幾筋も貼りついていて。いつも涼やかな切れ長の目が今は潤んで揺れ、白磁の頬には篝火の色が差している。額の朱の印が、火明かりに濡れて光る。昼間の気高さは、もうどこにもない。

朔だけが知っている。この巫女の、表の顔と、夜の顔を。



——ここから先は製品版でお楽しみください——